

## あとがき

今回の展覧会はジョゼフ・アルバーズ Josef Albers (1888～1976) の油彩展である。アルバーズが1950年以降執拗に追究した「正方形頌」Homage to the Squareの仕事が1954年から73年にわたる19年間に作成した19点の油彩——サイズは40×40cmが最小で、最大は100×100cm——によって展示するものである。

アルバーズの作品については、版画(シルクスクリーンが多い)こそ観る機会があり、当画廊も3年前にアルバーズ版画展(1983, 6/1～18)を開催している。しかしながら油彩となるとなかなかわが国では観る機会が少ない。かつて私は東京国立近代美術館で開催されたアメリカ現代美術展、バウハウス展、構成主義と幾何学的抽象展等でアルバーズの油彩を数点観たことがあり、東京の現代美術を扱う画廊でも単発的に数回観た記憶があるが、その程度である。したがってこの展覧会はわが国における最初の油彩による個展ということになる。主催者の私としてはいささかの感慨を憶えるのである。

カタログのテキストは八重樫春樹さん(国立西洋美術館)にお願いし、冒頭の「アルバーズ展に寄せて」と題するエッセーをご寄稿いただき感謝している。この文章をお読みいただくとアルバーズの芸術と人間が歴史的によく解る。ご一読を希う所以である。なお、この展覧会のためにポスターを作成したことも付け加えておきたい。

アルバーズの「正方形頌」の作品をじいっと観ていると、私は一種瞑想的な気分におち入る。これは正方形そのものが持っているひとつの厳然たる揺ぎない「かたち」と計算し尽された色彩(3～4色)の階調の美しさによってもたらされるものである、と私は思う。一点だけ作品を観るのも楽しいが、二ないし三点並べて観るのもいい。それにマチエールのしっとりとした美しさはデリケートで比類がない。この息をのむような美しさこそ純粋なる絵画そのものという感がする

のである。

3年前のことであるが、アキラ・イケダ画廊で個展のため来日中のリチャード・セラが当画廊に立寄り、たまたま当画廊で開催中のアルバーズ版画展を観たことがある。その時セラは「アルバーズは私の先生です。」と話してくれた。アルバーズとセラの仕事が全く異質なものだけに印象深く憶えている。そのセラの展覧会カタログの年譜を読むと彼がアルバーズの著書「色彩の相互作用」の仕事を手伝った、と記されている。またR・ラウシェンバークのことを調べた時、彼もアルバーズに習ったと年譜に記されてあったのを憶い出す。

このようにアルバーズは優れた作家であるとともに、色彩論等の著書が示すように学者であり、さらによき教育者でもあった。ドイツ生まれで戦前バウハウスで仕事をし、アメリカに亡命して、アメリカの戦後の現代美術に大きな影響を与えたアルバーズの偉大さは強調されていい。

この展覧会開催についてはギャラリー・ドニーズ・ルネ galerie denise rene の協力を得た。この画廊はオプティカル・アートの拠点として戦後の現代美術史に大きな足跡を残している画廊で、私もかねてからその存在を知り、秘かに敬意を払っていた。一昨年、朝日新聞社の主催でパリ・東京現代美術交流展が開催されたが、その際当画廊はこのドニーズ・ルネ画廊と組み、山田正亮をパリで、クリューズ・ディエスを東京でお互いに交換展をしたのがお付き合いの始まりである。その後次第に取引が深化し、この度のアルバーズ展となった。その意味ではこの展覧会はパリ・東京現代美術交流展のひとつの成果である、と言ってよいであろう。

私はこのアルバーズ油彩展が開催できたことを実に嬉しく思っている。というのも、この展覧会は私の年来の夢のひとつの実現であるからである。それをかなえて下さったマダム・ドニーズ・ルネ Madame Denise René の好意に感謝するとともにマダムのご健勝を心から祈るものである。

1986年3月8日 佐谷画廊

佐谷和彦

Catalogue no.43-1986